

最終講義

「自然と風俗——イギリス文学私見」

小野寺 健

今日の題は、自分では名案のつもりで「自然と風俗」ときめました。しかし、皆さんはこの題からどんな話を想定なさるでしょうか。これは、すでに一昨年あたりに考えついた題なのですが、去年の冬のゼミ合宿で、社会はある程度の乱れがあるほうが安全なのだといった雑談をしたところ、それを学生諸君が記録してくれたのですが、それを読むと少々不安になりました。どうやら「風俗」という言葉は、さいきんの若い人のあいだでは、訳の分からない——もっぱらあやしげな——いわゆる「風俗産業」と同じ意味で使われているらしい。これには面食らいました。それではせっかく名案のつもりだった題も「自然と風俗産業」とでもいった、いよいよ怪しげなものになってしまう。

しかし「風俗」という言葉の意味は、むろん、例えば岩波国語辞典では「衣・食・住や行事など、その社会集団の生活の上のさまざまな仕方やしきたり。その有様」となっています。かんたんにいえば、生活上の慣習、風習——英語なら 'manners and customs' といった言葉にあたる。イギリスには、伝統的に「風習喜劇」 'comedy of manners' と呼ばれる種類の芝居があります。典型的な作品は、1700年に Congreve という人の書いた *The Way of the World* という芝居で、これは「世の習い」と訳します。容易に想像がおつきになるでしょうが、要するに人間の卑俗な面をあつかう芝居です。この「風習喜劇」の定義を研究社の『英米文学辞典』でもう少しくわしく調べてみると、ややおかしい日本語のまじった文章で

すが「モラルとか情熱とかを描く代わりに、主として社会生活の風俗・因襲などの愚かさを遊離的にとりあつかうもので、非常に理知的で、しかも軽妙洒落をきわめ、野暮無粋はもっとも嫌われ、‘sophistication’の著しいのが特徴である」とある。

この説明にはいくつか勘どころがあります。第一に「モラルや情熱をあつかわない」ということ。これは、教訓を説いたり理想を歌いあげたりはしないということです——つまり現世の本音の事実をそのまま、あるいは相当に誇張して批判的にあつかう。人間の本音、現実の姿を描くのですから、これはきわめて人間的です。そうなると、考えてみれば、例の風俗産業ともかならずしも無縁とは言えないかもしれません。

第二は「理知的」だということです。つまり、怒りにせよ、喜びにせよ、悲しみにせよ——感情的にならない。英語でいえば‘emotional’にならない。冷静に、つきはなして現実をそのまま見るのです。それが知的・理性的な立場で、ヨーロッパの18世紀というのは理性の時代でした。風刺の精神もそこから出てくるのでして、情に溺れていては辛辣な観察はできないわけです。たとえば、スウィフトの『ガリヴァー旅行記』という辛辣な人間観にもとづいた風刺文学の傑作は18世紀の作品でした。漱石の『我輩は猫である』も、そういう文学だと言っていいでしょう——漱石という人は、18世紀のイギリス文学から非常に学んでいます——風俗という言葉は、ほぼこの風習と同じ意味なのです。それなら、これと対置されている「自然」が逆の概念であることは、見当がおつきになるはずです。

ところが、今日の題の「自然」も、うっかりするとこの「ありのまま」の「現実」、つまり、いま説明した「風習」「風俗」の意味にとられかねません。事実、「自然」という言葉にはそういう「人間の自然なありかた」の意味もあるわけですが、今日の「自然」は、むしろ人間の俗な面と対立する、人間を超えた或る「理想」を指しているのです。なぜ「自然」が

「理想」と同じ意味の言葉になるのか、それがこれからお話しする内容なのですが、こういうわけで、今日の題名は「理想と現実」という風に言い換えてもいいのです。ただ、それでは、わたしの言いたいことを表すには抽象的一般的にすぎて、主題が曖昧になってしまう。ここはぜひ、自然という言葉を出しておきたいのです。

そこで、今日の話での「自然」という言葉の意味について、もう少しお話ししておいたほうがよさそうです。というのも、この言葉には、あらためて考えてみると、いろいろな意味があるからです。こんども岩波の辞典を見ますと、まず「人手を加えない、物のありのままの状態・成り行き／この世のあらゆる物の総称」という定義があってから、やっと三番目に「人間の社会から離れた立場で考えた（ありのままの）天地万物」という定義が出てきます。説明の順序としては妥当なようですが、ついでに、三省堂の『新明解国語辞典』を見ますと、こちらにはまっさきに「天体・山川草木・動物など、人間社会を取りまき、なんらかの意味で対立するすべてのもの。狭義では、山川草木を指す」という、世間で普通に考える意味が出ていて、それとは別立てで、宗教における自然の概念、哲学における自然の概念の説明がある。そして哲学では、「認識の対象となる、すべての外界を指す」とあります。この他にも、いうまでもなく、自然科学における「自然」の概念もあるわけです。

それぞれの専門分野の方は、いまさら中学生の宿題みたいなことを言っていると思われるでしょうが、まずあえて恥をさらして、こんな話を持ち出すのは、例えば哲学書を読んでいると、「人倫的自然」といった言葉に遭遇する。そして、それが分かりきった言葉として用いられていて、これはヘーゲルの場合には「ご承知のように家族・市民社会・国家という三段階をふくんでいるもの」だ、といった説明にぶつかります。ところが、こちらはかならずしもご承知ではない——という具合なので、「自然」など

という言葉は、不用意に使えば、話を無意味にしかねません。鍵になる言葉の意味が、こういう具合に専門分野間で異なっているのは、学際的な研究など成り立ちようがないでしょう。

それなら、文学の研究者も哲学の場合と同じ意味に使って、哲学的に考えればいいのかというと——そういう文学研究はむろんありますが——そういう方法をとったのでは、文学の独自性が——存在理由が失われてしまう、とわたしは思います。文学というのは、観念では割り切れない、整理しきれない、複雑で矛盾みみちた人間の姿を総合的にあつかうからこそ独自の存在理由があるはずなのに、それが観念がらみの瘦せたものになって、人間が消えてしまう。最近はそのような哲学的な文学批評が盛んですが、これにはすでにまた反省が出てきています。とはいっても、鍵となる言葉の定義くらいは、異なる分野での用法を意識して、さいしょに明確にしておいたほうがいいでしょう。

そこで、今日の「自然」は、少なくとも議論の出発点では、ほぼ「山川草木」という、常識的なものであるということを、まずはっきりさせておきます。

これほど「自然」という言葉にこだわるのは、イギリス文学あるいは文化では、自然が人生観に密着しているからです。歴史家のアーノルド・トインビーは、ヨーロッパの文化というのは「自然を征服すること」である——山を削り、川をせきとめ、要するに自然がもたらす不利な物質的条件を克服して生活を快適にすることで、その点ではアメリカの文化もソヴィエトの文化も本質的に同じなのだ、米ソの対立時代に指摘しました。なるほどと思いましたが、かりに欧米文化の自然観の「大枠」がそうだとしても、イギリス文化は、それだけでは割り切れない気がします。それほど、イギリス人の自然にたいする「思い入れ」は深い。

よく知られているとおり、イギリスには、持続を文化だと考えて、すべてをなるべく変えずに温存しようとする保守的な伝統があります。この、変えたがらないものの筆頭が、自然ではないかと思います。自然が変化せずに持続することに、イギリス人は文化の継承を見ると言っているのではないか。彼らにとっては、祖父の代から変わらない自然とそれについての共通の記憶こそ人生なのであり、持続・継続する時間の象徴なのです。トインビーの指摘にもかかわらず、アメリカ文化にも超絶主義者をはじめ自然を重んじる伝統はありますが、それには今はふれません。ただ、一例として一人だけ、『ハックルベリ・フィン』を書いたマーク・トウェインという作家を思い出していただきたいとだけ申し上げておきます。

そこで、今のようなイギリス文化観の例として、ジョージ・エリオットというイギリス作家の小説の一節から本論に入ります。といっても、この本論はかんたんに終わりますからご心配なく。名前がジョージなら男だと思われるでしょうし、確かにこれは男名前ですが、この人はじつは女性作家——19世紀イギリスの有名な女性作家です。といっても、日本では、昔、英語の教科書によく使われた『サイラス・マーナー』という作品を別にする、あまり読まれてはいない。第一、どの小説も長すぎて、しかも日本の普通の読者の目から見ると、物語とは関係ないと思える議論のような部分が多すぎる。中村真一郎という、大学ではフランス文学を専攻した博識な作家・評論家がありますが、この人が昔、もっとイギリス文学を読みたいという文学好きの友人にジョージ・エリオットの小説を貸したところ、とてもついていけないと言って二、三日で返しにきたという話を読んだことがあります。それほど日本人にとっては退屈で読みにくい作品が多くて、わたし自身も若いときにはとても読みとおせませんでした。ところが一昨年、彼女から彼女の代表作のひとつである『フロス河畔の水車場』という小説を演習で読みなおしてみ、非常に感心したのです。

これは、大きな河の畔にある、イングランドの田舎町を背景に、その水車場の娘の人生を描いたもので、ヒロインの Maggie Tulliver という若い女性は、ほぼ作者の分身と見ていいのですが、このマギーが、トムという兄と恋人への愛の板挟みになって苦しみながら成長していく話です。この兄と妹の性質は対照的で、兄は知的・観念的なことは苦手な、だが実務的なことは得意で、誠実で、意志も強い人間なのですが、マギーは意志の強さでは負けないけれども、おしゃれなどには関心のない、読書好きで知識欲がつよく、想像力も感情もゆたかな、活発な女性です。物語は、この兄妹の両親や親戚、とくに母方の金持ち一族の因習的な生活感情や価値観の描写をからませながら、つまり「風俗」描写を重要な要素としながら、展開していくのですが、この人生には、イギリスの田舎の「自然」が深くかかわっているのです。はじめて読んだときには、この自然描写をどう読めばいいのか——つまり、物語の筋との本質的なかわりが分からなかった。ところが、こんどは——あきらかに年のせいですが——すっかり感心して、この小説での、自然描写の意味が痛いほどよく分かりました。その一例が、これからご紹介する箇所、幼いマギーとトムが、フロス河の支流である、リップル河の畔で遊んでいるところ——

「マギーは魚がぼちゃん跳ねたり、泳いだりしているかすかな音を聴きながら、いつまでも、自然の囁きと夢のような静けさにうっとり浸っていた。まるで柳や芦や河の流れまでが、幸せにささやいているようだった……

河ぞいに歩いていって腰を下ろす兄と妹は、自分たちの人生が大きく変わることがあろうなどとは考えてもいなかった。二人はただ大きくなるだけで、遠くの学校へ行くこともなく、いつまでも休日のような日がつづくのだ。二人はいつまでも一緒に、おたがいに大好きで、水車はいつまでもがたんごとんとまわりつづけている——二人がその陰でままごとをした

大きな栗の木。その土手もわが家のような気がする懐かしいリップル河。トムはいつでも水鼠を見ていて、マギーは芦の紫色に毛ばだった穂を摘んでみるものの、やがて忘れて失くしてしまう。そして何よりも、フロスの大河だ。二人が旅行にでも出たような気持ちで、春とともに飢えた怪物のように襲ってくる奔流を——恐ろしいエイガー（*河口に押し寄せる急潮）を見に行った大河だ……

恐ろしい大河の奔流というのは、兄妹二人のその後の悲劇的な運命を暗示しているのですが、その話はいまは省くとして、この一節の魅力は、自然にたいする熱い愛情を歌いあげている描写にあります。魚の跳ねる音、木々のたたずまい、回転をつづける水車の音——こういうものの記憶が、兄妹の人生と一体になっている。そういう記憶が人生そのものなのです。イギリス人なら、この箇所を読むと、われわれが、例えば島崎藤村の『夜明け前』の「木曾路はすべて山の中である」という書き出しに即座に或る感慨を誘われるのとおなじように、おそらく戦慄にちかい感動をおぼえるだろうと思います。

ここでは、いわば絵の具を塗りかさねるようにして、自然の思い出が、自然への愛が、これでもか、これでもかと、思い入れ深く語られている。そして彼らは、この思い出を先祖と共有しているのです。同じ思い出を介して、人々の意識は先祖とつながり、歴史とつながっているのです——それこそ、けっきょく人生の実質なのです。何度もくりかえされる「いつまでも、いつまでも」という言葉に秘められている、この「持続の感覚」「変わらないものへの愛着」——これこそイギリスの保守の精神の神髄ではないかとわたしは思います。作者は、この少しあとで、

‘What novelty is worth that sweet monotony where everything is known and loved because it is known?’（知っているものなので何もか

も分かっていて愛してもいた、この甘美な単調さに替えられる新奇なものなど、あろうか)と言っています。新しいものより、知り抜いている古くて変わらないもののほうが遙かにいいと断言しているのです。

こういう好みから判断すると、ジョージ・エリオットという作家はセンチメンタルな、保守反動的な人だったのだらうと思われるでしょうが、それどころか、彼女は宗教的にも道徳的にも、当時としてはきわめて新しい、過激な思想の持ち主で、実人生でも、妻子のある年上の哲学者との同棲をつらぬいて結局世間に認知させてしまったという、ヴィクトリア朝時代のイギリスでは考えられないほど大胆な人でした。そこがたいへん興味ぶかいのです。つまり、保守的な好みと革新的な思想が平然と結びついていて、イギリス人は、それに違和感を抱かないらしいということです。ただし、これには時代も考慮にいれないといけないかもしれません。19世紀辺りからは「自然を愛することこそ革新的だった」のだとも考えられるかもしれないのです。

これは、イギリス文化の特徴を考える上でとても大きな、興味ぶかい点ではないかと思います。というのも、皆さんもご存じかと思う作家の名あげてみても、ウィリアム・ワーズワス、トマス・ハーディ、D.H. ロレンス、ジョージ・オーウェルといった人たちは、例外なく、自然の熱烈な讚美者なのですが、この人たちはいずれも革新的な、過激と言っていい思想の持ち主でした。

ところが、イギリス文学には、古くから、かならずしも革新的な政治思想などとは関係なく自然を愛する伝統がつねにあります。そして、それ自体はイギリスでも、やはり、ふつうは保守的な感受性だ、姿勢だととられるらしく、オーウェルも例えば「ヒキガエル頌」という、春の訪れを讚えるエッセイの中でそういうことを言っている。つまり、春の再来を讚美したりしてはプチ・ブル的だと批判されるだらうというのです。

では、イギリス人の自然にたいする愛情は、彼らの思想あるいは文化とどう関わっているのか——これはおそらく、イギリス人にとって「思想」とはどういうものなのかを問う、ひいてはイギリス文化の、おそらくとても大きな特徴、本質を考えることに通じて、それこそわたしの今後の研究課題の核になるのではないかと考えているのです。

むろん、いま名前をならべた作家たちの場合も、自然との関わり方は、正確に言えばそれぞれで少しずつ異なるわけで、すべての作家について触れる時間はありませんからオーウェルに例をとりますと、さまざまなエッセイにはもちろん、一九四七年段階で全体主義社会の未来を予想した有名な未来小説『一九八四年』にも、主人公のウィンストン・スミスが恋愛を禁止する全体主義国家の法に背いてデートにでかけて、田園の美しさに浸る場面がありますが、その描写がたいへん古風で魅力的なのです。その自然描写は『一九八四年』という革新的な作品にはそぐわないように見える。この小説には、革新的な思想と保守的な自然讃美という、矛盾するものが共存している印象をうけるのです。しかし、この場合も、さきほどの論理をあてはめると、まさにイノベーションの極致と言える体制と保守的な自然を対置させた点こそ、オーウェルの批判なのだとも考えることもできるかもしれません。事実、オーウェルよりもかなり年上の、今世紀初頭の作家ロレンスの場合はまさにその典型で、ロレンスは産業主義の文化にたいする批判概念として自然の重要性を主張しました。そして、彼にとっては性こそ、人間にとって「自然」の最たるものだったのです。

ところが、こういう、いわば「過激な自然」にたいして、さらに一世紀ほど昔の詩人というよりイギリス文学を代表する詩人ワーズワスの場合は、青年時代にはフランス革命に情熱を燃やしたのに、やがてその情熱が冷めて、少年時代に精神を育ててくれたものとしての自然——イングランド北部、湖水地方の美しい自然——に思いを潜めるようになったと言われてい

ます。しかし、ワーズワスの場合も、革新的であることをやめて諦念にたっ
したと見るより、彼が自然に寄せる思いも革新的な思想の表れと見るのが
正しいのではないか——どうも、そういう見方が成り立ちそうに思えます。

そういう大問題は措いて、さしあたり、わたしが興味をおぼえるのは、
第一に、イギリス人は政治的な思想とはかかわりなく左右の対立を超えて、
自然は精神を育ててくれる教師だと考えているらしいという点です。その
ために、自然にたいする共通の愛情あるいは尊敬の念が、保守・革新の
「接点」になる、つまり、自然という「人を超えたもの」に寄せる伝統的
な思いが、「現実の社会」における対立の本質的な不毛性を自覚させる役
割を果たしてはいまいか——所詮人間が考えだしたものにすぎない思想の
限界を、政治思想では対立するような場合でも、その対立を超えて、ある
いは意識の底で、暗黙の前提としておたがいに認め合っているのではない
か、ということです。それは、おたがいの思想の限界を認めることですが、
思想の限界についてのこういう認識があることこそ思想の成熟と言ってい
いのではないのかと思うのです。

つまり、この世には、というより人間の意識の世界には、代表的な能力
としての理性とか知性によって理解できる領域——つまりヒューマンイズム
の基盤となる精神の領域と、人間的能力ではたっしえない、あるいは瞬間
的には直観によってたっすることができても持続的に捉えておくのはむず
かしい、「神秘的」としか呼びようのない領域と、ふたつの領域があって
——宗教家なら後者を神と呼ぶでしょうが——一般のイギリス人にとって
は、それがほぼ「自然」にあたるのではないかと思うのです。

こういうことをわたしが考えるようになったのは、あきらかに E. M. フォー
スターという、1970年に亡くなった作家の影響です。フォースターの名が
出てくると、多少ともわたしをご存じの方は、ああこれでこの話も終わり

だな、そこへ話を落とすのか、とお思いになるでしょうが、そのとおりです。そこで、話を早く終わらせるために、フォースターの具体的な作品に即して議論をすすめますが、初期の作品で「岩」という短編があります。あまりいい出来のものではないのですが、若いころの不器用なものだけに、かえってフォースターの考え方がはっきり出ている作品です。語り手が——まあ男でしょうが、断定はできません——一人の中年の婦人から、彼女の夫が休暇で訪れたイングランド南部の村であやうく溺死するところを村の人たちに助けられた話を聞いて、そのあとに感想をつけくわえているという形式の短編ですが——じつは、この問題については「論叢」に書いたことがあるのですが、どなたもお読みになっていないだろうと思います。その夫は一人で漕ぎだした舟がひっくりかえって溺れかけたところを村人に救われた。そこでお礼が問題になったのだが、きまった金額などはない。彼は、感謝のあまり多額のお礼をするようなことを口走ってしまったので、村の人たちはすっかり当てにするようになった。ところが、失いかけた命を救われた彼の人生はそれまでとは一変して、生き生きした幸せな光にあふれてきて、すっかり幸せになってしまったものですから、彼はさんざん思い悩んだあげく、これほどの幸福にたいするお礼など、金や物に換算できるものではないという結論を出します。そして、妻がどうやら生活していけるだけのものを残して全財産を処分したのち、自分は一文なしになってその村へ舞いもどると、今はある家の手伝いをして暮らしているというのです。

物語は、一見、ここで終わったように見えます。命は金に換えられるものではないという寓話のように見えます。ところが違う。この短編の急所は、物語が終わったと見える、その後にあって、主題はさいごで逆転するのです。

語り手は「このときの夫人との会話で、わたしは墓に入る前にも人生の

真理を見抜ける人がいることを学んだ」と言ったあと、すぐつづけて「そういう人を羨ましいとは思わない」と意外なことを言うのです。「そういう冒険は肉体を持たぬ魂にとっては得るものがあるかもしれないが、肉体を持っているあいだは、卑俗なまま、そんな真理とは無縁でいたいものだ。人間の卑俗な生活にもさまざまな夢はある」と言うのです。そのあとがさらに数行あるのですが、さしあたりこれで充分です。これを抽象的に言い換えれば、この語り手は、人間の理性を超えた真理の世界があることを認めながら、反面でヒューマンイズムの重要性を説いているのです。

フォースターのこういう考え方は代表作の『インドへの道』では、はるかに大きなスケールで展開されています。かんたんに言えば、この小説はイギリスとインドという、二国の対立をモデルに異文化間での人間相互の理解は可能かという問題を追求したものだと言えますが、その結論は、「地上では」不可能だということです。ただし、むろん、それだけを言っているではありません。地上の人間社会の上には空がひろがっていて、「この空が地上のあらゆることを決める」——つまりこの場合、空が「自然」の——人を超えるものの——最終的な典型なのです。人は、人生のときどきに、そういうものがあることを、まれに垣間見ることがある、それによって人間の限界を知る——いや、知らなければならぬ。同じことはどんな対象や問題についても言えるわけですが、異文化が対象の場合なら、そういう認識があってはじめて、異文化にたいして謙虚になれる——これがフォースターの結論なのです。彼の、こういう思想は、人生にせよ、愛にせよ、さまざまな主題をあつかった小説やエッセイで、もっと一般的な形で展開されています。

つまり何でも分かるとかできると思って、理想に邁進するのは危険だ、とフォースターは考えるのです。理想というのも人によってさまざまに異なるのだから、それでは自分の恣意的な価値観を他人に強制することになり

かねない。人間には、そういうことをする資格はないのだということです。

くりかえせば、人知などは高が知れている——人を超えるもの、「自然」という概念で表される精神の領域を忘れず、人間の限界を自覚しろというわけです。フォスターはナチスのエリート主義的な文化観を批判して、民主主義を擁護したのですが、それには土台にこういうイギリスの伝統的な信念があったからでした。彼は、文化というのは、能力に差のあるいろいろな人間があつまってゆっくり、のんびり、だらだらと造ってきたものだ。「文化と自由」というエッセイで言っています。そして能力も性格もじつにさまざまな人たちが勝手な意見を表現するのを許し、またそれを批判できる自由を保障するから、民主主義は政治制度としてはいちばん優れているというのです。ただし、これも結局人間の造ったものにすぎないから完全ではなくて、「愛」のように人間には達成不可能な徳を保障しはしない。思想の自由と批判の自由を保障するので、民主主義も二度の万歳には値するが、三度の万歳に値するのは、あくまでも理想にとどまって現実のものにはなりえない「愛」を可能にするような、そういう制度——そういう制度があるとすれば——なのだ、というのです。

「岩」で描かれている、人間的なものと、人間を超えるもの——つまり「自然」——を対立させる考え方は、こうして、彼の後半生における政治的な評論活動にも活かされて、彼は伝統的な自由主義の守護神と仰がれるようになりました。

ふたたび要約すれば、人には達成できない価値の存在を忘れてはいけないが、人は所詮人である以上、人として達成可能な制度を、混乱はあっても守っていこう——こう彼は考えているわけで、人間の本性の認識に立ったこういう思想こそまさにヒューマニズムでしょう。そういう考え方をする人ですから、フォスターはキリスト教をふくめて一切の絶対的信条を拒否しました。有名な「わたしの信条」というエッセイで、自分はモーセ

やパウロには付かず、エラスムスやモンテーニュの懐疑的な精神に付くと
言いました。

わたしは、イギリス文化の正統として認められているこういう思想を、
イギリス文学の特質とのかかわりで考えたいのです。イギリス文学で
は、詩——それもロマン派の詩には、人を超えるものへの憧れがつよいの
に、小説には、エミリ・ブロンテの『嵐が丘』とか、ロレンスの作品のよ
うな少数の例外を除くと、そういう作品が少なく、もっぱら人間の風俗の
克明な描写に固執しているように見えます。そこがドイツ、フランス、ロ
シアといった国々の小説とあきらかに違うように思えるのです。ですから、
さいしょにご紹介した笑話のように、多分に情緒的な日本人は退屈して
しまいます。

そこで、いよいよ結論ですが、わたしは、この「風俗」に固執するイギ
リス小説の伝統こそヒューマンイズムの表れではないかと思うのです。変わ
りばえのしない、毎日毎日くりかえされる、些細に見える日常の出来事を
愛し、その変化のなさに愛情を感じることができる能力——それがイギリ
スを、刺激には乏しくても安心して暮らせる国にしているのであって、性
急な日本人には退屈だけれども、日常の執念ぶかい描写に固執するイギリ
ス小説は、彼らのこういう性質の表れなのではないか。

イギリス人も激しい感情を知らないわけではありません。フォースター
も、「イギリス国民性覚書」というエッセイのなかで、ロマン派の詩がそ
れを証明していると言っています。しかし、イギリスの小説は、理想を知
らないのではなく、「自然」という、人間には超えられないものへの憧れ
はあっても、あえて「風俗」のレベルに踏みとどまろう——二流の安全性
を採ろうとしているのではないか。地道で実際的なヒューマンイズムの表れ
なのではないのか——これが、今のところ、イギリス小説についてのわた
しの見方なのです。

だからこそ、ジョージ・エリオットをはじめ、イギリスの多くの小説家は、自然を讃美する一方で、執拗な風俗描写に固執する。愛したり、争ったり——人間はいつの時代でもそういうことを繰り返していますが、それを自然がじっと見ているのです。

かんたんには変わらない自然への憧れ——それがイギリス文化の保守性を端的に語っているように思えます。しかし、そういう気持ちはイギリス人には限らないはずで、小林秀雄氏にこういう話があります。年をとった一人の女性が、ある日とつぜん、自分が子供のころしじゅう歩いていた道にあった、一本の大きな（栗の）木を見たくてたまらなくなった。そこでがまんできなくなって、そこへ行ってみるとやはりあったので満足した、というのです。この話を聞いた若い編集者か何かが、それは誰の思い出なんですと訊くと、バカだな、おれの作り話にきまってるじゃないか、と小林秀雄は答えたといっています。

わたしは、この大学に足掛け35年間お世話になりました。そのあいだには、着任当時は校舎もないにひとしかった大学も、すっかり立派になりました。これからもしばらくは、さらに施設が充実するでしょう。しかし、その建設計画が一応完成した暁は、もうあまり変えないで、それを大事に守りつづけていけないかと思うのです。これは、さいしょから100年も200年ももつ贅沢なものを造れということにもなって、無理はあるのですが、わたしたちが何年もたってまた訪ねてきたときに、思い出の教室や研究室が昔と同じようにあって、同じような顔をした人がいて、ある価値を守りつづけていることを思わせるというのも、とても人間的なことではないでしょうか。それは感傷ではなく、持続している意識つまり記憶というのは、人間性と切り離せない文化の本質的な要素だと思うのです。

わたしはこの大学に長くいたおかげで、かつて教えた人のお子さんたち

も何人か教えるという幸運に恵まれました。今日は、そういう世代の方々も幾人も来てくださいました。わたしの果たすべき責任はまだ終わっていませんが、人生のひとつの区切りに、そういう方々が拙い話をふたたび聴いてくださったことに感謝いたします。ご静聴ありがとうございました。

(平成8年1月26日)

付 記

小林秀雄氏をめぐる話の部分には記憶ちがいがあった。年をとった一人の女性とは、氏の長野生まれの夫人で、これは「栗の樹」という氏のエッセイに書かれている実話である。後半の若い編集者云々の部分は、完全な記憶ちがいによる私のフィクションであった。このエピソードは、「さて私の栗の樹はどこにあるか」という言葉で終わっている。